

社会史研究に基づく歴史授業構成(Ⅰ)

—阿部謹也氏の伝説研究の方法を手がかりに—

社会系教育講座 原田 智 仁

本研究では、現行の中等歴史授業を改善するひとつの方法として、〈社会史研究〉に基づく歴史の授業構成を考察する。具体的には、まず阿部謹也氏の「ハーメルンの笛吹き男」伝説に関する研究を取り上げ、そこにみられる氏の社会史研究の方法論を分析する。次いで、そこで明らかにした伝説研究のモデルをもとに、高等学校の世界史を対象にした歴史の授業プランを創造する。それは、授業過程・授業内容ともに阿部氏の社会史研究に依拠したものであり、その成果は教師の発問と生徒の予想回答(認識内容)の中に示される。

また、ここで創造される授業プランは、歴史教育において伝説を教材化する場合の授業モデルといえる。したがって、実際にこの授業を追試し、さらに他の主題についても授業プランを作成し追試してみることで、授業モデルとしての有効性を検証することができる。その意味で、本研究は個々の教師の力量と試行錯誤に依存してきたこれまでの歴史授業にひとつの改革の方向性を示唆するものである。

キーワード：社会史、歴史授業構成、伝説、高等学校世界史、教授書

1 はじめに

わが国の中学校や高等学校で一般に行われている歴史の授業が、生徒の歴史への興味・関心を呼び起こしたり、歴史的なみ方、考え方を育てるものになっていないとの批判が聞かれるようになって久しい。これに対し、大学の教官・研究者のレベルでは諸外国(とくに欧米)の歴史教育改革の動向や先進的な歴史(社会科歴史)授業モデルが紹介されてきたが、それらの多くは現場の授業を実際に改革する力となっていないのが実情である。

筆者はかつて高等学校で世界史を教えるかたわら、生徒に人気のある歴史(日本史、世界史)の先生の授業を参観させていただくとともに、なぜその先生の授業がよいのかを直接生徒たちに聞きただしてきた。その結果、教師の個人的魅力に関することを除けば、生徒のよいと考える歴史の授業には驚くほど共通点があることが明らかとなった。参考に、昨年度(1989年10月)3年生のあるクラス(男子19名、女子26名)で行ったアンケートの結果を示してみたい¹⁾。なお、その学級は普通科であり、いわゆる大学進学レベルからいって中程度の学校の生徒たちである。回答は自由記述式であったため多少表現に違いがみられ、中には必ずしも歴史の授業に固有な条件とはいえないものもあったが、延べ回答数の多かったものから五点をあげてみると次のようになる。

- | | |
|-------------------------------|-----|
| ① 説明がわかりやすいこと。 | 31名 |
| ② 授業にヤマがあること。 | 22名 |
| ③ 歴史の裏話などをエピソード的に話してくれること。 | 18名 |
| ④ 教師の個人的な体験や人生観・歴史観を話してくれること。 | 17名 |
| ⑤ 生徒に語りかけてくれること。 | 10名 |

これをすべて裏返してみれば、生徒におもしろくない歴史の授業が浮かび上がってくる。教師は教科書の内容を解説しつつ要点を整理して板書し、生徒は教師の解説を聞きつつ板書事項をノー

トに書き写す。したがって脱線の少ない教師の授業は、生徒にとってそれだけノートをとる時間が増えるのであり、加えて生徒に語りかけることもなくわかりにくい説明ならば、授業は苦痛そのものと化すだろう。歴史の授業改善として、現場の研究会などでの発表によくみられるのは、歴史地図・年表・絵画・スライド・ビデオなどの視聴覚教材の活用と歴史新聞や年表の作成といった作業学習に関するものである。そうした試みも確かに大切ではあるが、年間の授業時数に占める割合からいえばそれは微々たるものにすぎない。むしろ大半の授業が講義式の解説で行われる以上、まさにそれを対象にして改善の方策を検討していかなければ、研究のための研究に終わってしまうであろう。

そこで、ここではあくまで上記の五点を手がかりにしてみたい。まず注目されるのは、生徒たちが必ずしも講義式の授業を嫌ってはいないことである。筆者の経験からしても、中等段階の歴史授業は原則として講義形式に基づくべきだと考える。批判される生徒の歴史嫌いの増大は決して講義式の授業に由来するものではないし、講義式を否定する授業形態では現実性に欠けるからである。もちろん、ここでいう講義とは教師による一方的な伝達や注入を意味しない。問題は、教材選択と授業構成のあり方なのである。さて、生徒の指摘した上記の五点を筆者なりに解釈すると、①②は基本的に授業過程に関する問題提起であり、③④は授業内容に関するものである。なお⑤は双方に関するものと考えることができる。まず授業過程についていえば、①⑤の生徒に語りかけるわかりやすい説明とは、授業を主題に関する一連の問いを追求する過程としてとらえることを意味するし、②のヤマ場のある授業は問いの追求を発見的・探求的な過程として組織することで可能になる。また授業内容についていえば、③の歴史の裏話とは既成の伝統的な歴史学の対象から排除されてきた庶民（弱者、敗者）の意識や生活・風俗も視野に入れるべきことをさしているし、④⑤からは歴史の授業が教師と生徒の日常生活ときり結ぶかたちで構成されねばならないことが読み取れる。

筆者はこうした問題や生徒の要求に応えるためには、歴史の授業を社会史研究に基づいて構成することが必要だと考える。一口に社会史といっても、その意味するところは国により、また論者によって多様である。だが、少なくとも最近の日本では、「日常生活の諸局面から歴史をみなおそうとする動き」⁹⁾として社会史に関心が集まっているのは確かであり、実際その方向で着実に成果をあげてきた。ただ、常に現在の自己や世界とのかかわりで社会史にアプローチしている歴史家はそう多くない。その中でとくに注目されるのが、西洋（ドイツ）中世史の研究で知られる阿部謹也氏である。そこで、本稿では阿部氏の社会史研究に依拠して歴史の授業（授業内容・授業過程）を構成してみたい。そうすれば、これまで生徒たちに歴史の裏話としてしかとらえられなかった内容が、実は歴史の中心的主題になりうるということがわかってくるし、それがまた自分たちの生活やそれを取り巻く現代と深い関わりをもっていることに気付くからである。さらに、阿部氏がどのような問いによってテーマに迫り、それにどう答えていったのかという研究方法を明らかにすることで、探求（発見）としての授業過程を構想することができるだろう。

そこで本稿では、まず阿部氏の社会史研究の方法論を明らかにしたい。すなわち、阿部氏は社会史についてどのようにとらえているのか、また氏の具体的な社会史研究の方法（研究過程および研究成果）とはいかなるものか、それらを氏の著作とりわけ後者については『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』（平凡社、1974年）の中に探ってみたい。次に、そこで明らかになった阿部氏の社会史研究（伝説研究）に基づいて、実際に歴史の授業プランを創造してみることにする。

2 阿部謹也氏の社会史研究の方法論

2.1 阿部氏の「社会史」のとらえ方

阿部氏は最近の歴史学におけるコンピューターを駆使した数量化分析や気候学、人口＝生態学などの登場を、歴史学の可能性を高めるものとして評価しつつも、他方で大きな危惧の念を表明する。なぜなら、阿部氏にとって歴史学は「人間の尊厳を確かめてゆく学問のひとつ」であり、あくまで「人間の全体を描くという目的」³⁾から離れてはならないと考えるからである。阿部氏が人間というとき、その目は民衆とりわけ無縁の世界に生きる人々に向けられる。その理由を我々は次の文章から読み取ることができる。

「ひとつの社会の内部でなんとか適応している層や、さらに社会的上昇を目指している層と、ひとつの社会のなかで正当な地位を保障されず、常に生活と生命の危険にさらされつづけている人々との間では、社会や国家、歴史についての真理と経験のあり方は全く異なる様相を示すであろう。そしてひとつの社会や国家内で適応してゆける層や、さらに上昇を目指す人びとを主体とした社会認識の試みや歴史叙述としては、私たちは不十分ながらもかなりの学問的業績をもっているといえる。ところがひとつの社会や国家内部で適応しえず、常に生命と生活の危険に晒されつづけている人々にとって国家や社会、そして歴史がいかなるものとしてあったのか、という点になるといまだほとんど手がつけられていないのである。」⁴⁾

このような歴史学についての基本認識に立って、阿部氏は自らの研究の目的を「民衆史を中心とした社会史を描くこと」⁵⁾と設定する。氏は我が国の社会史研究者のあり方について触れ、「社会史研究を実り豊かなものにするためには社会史研究者の一人一人が外国の研究の紹介に始まることなく、自己の内奥から発する要請としての社会史について語らなければならない段階にきているのではないか」⁶⁾と指摘する。この「自己の内奥から発する要請」に忠実であろうとする氏の姿勢は、歴史の授業を教師や生徒の日常性と結び結ぶものにしようとする姿勢に通じてくるといえよう。なお、阿部氏にとって社会史とは「人間と人間の関係のあり方とその変化を探ること」であり、具体的には「ヨーロッパにおいて人間と人間の関係がどのように変化してきたのかを、モノをめぐる関係と目にみえない絆によって結ばれた関係との変化を通して、みてゆくこと」⁷⁾を意味する。したがって、氏の研究対象は主として仲間団体の形成と支配、賤視などの問題に向かうことになる。

では、人間と人間の関係の変化を探る社会史研究の方法とはいかなるものであろうか。阿部氏によれば、「社会史の方法を探ろうとするこの試みはその問題の性格からしてあらかじめ前提することはできないものであり、個別研究のなかで探ってゆくしかない」⁸⁾という。それはまた視点を変えれば、そうした研究方法の多様性にこそ社会史研究のメリットがあるのであり、「社会史研究が特定の形をもちはじめたとき、社会史研究は社会史研究ではなくなってしまう」⁹⁾ともいえるのである。こうした考えのもとに、阿部氏は中世史の舞台に分け入ってゆく。それは、ティル・オイレンシュピーゲルなどの民衆本における笑いの共有の問題であったり、刑吏の世界やアジュールの思想であったりする。そこで、ここでは阿部氏の数ある研究（著作）の中から『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』を取り上げ、氏の社会史研究の方法を探ってみることにする。

2.2 「ハーメルンの笛吹き男」にみる阿部氏社会史研究の概略

そもそも阿部氏とこの伝説との出会いは多分にハプニング的なものであった。ゲッティンゲンの州立文書館で、東ドイツ植民運動に関する地域の古文書を調査・分析しているとき、偶然「鼠取り男 Rattenfänger」という言葉にぶつかり、さらに読み進めていくとハーメルンの笛吹き

男による子どもたちの入植の可能性が示唆されていたからである。阿部氏は、このときの驚きを「私の背筋を何かが電気のように走るのを感じた」と述べている。そして、「この話には何か深い秘密が隠されていそうだ。私が今研究している中世東ドイツ植民運動とも密接な関係がありそうだ。」¹⁰⁾として、この伝説に憑かれていく。つまり、子どもの頃に読んだおとぎ話が、今や現実の自分自身の問題になっていったのである。

阿部氏はある対談の中で、『ハーメルンの笛吹き男』は最初からひとつの全体的な歴史の構想についてのマスタープランをもって各章立てを行ったのではなく、次々に仮説を訂正しながら検討していくうちに最後のところに導かれていったのだと述べている。¹¹⁾したがって、本書の構成がそのまま阿部氏の研究過程を示していると考えてよいだろう。そこで、本書の全体構成をみると、次のように二部八章からなっている。

第一部 笛吹き男伝説の成立	第五章 遍歴芸人たちの社会的地位
はじめに	第二部 笛吹き男伝説の変貌
第一章 笛吹き男伝説の原型	第一章 笛吹き男伝説から鼠捕り男伝説へ
第二章 1284年6月26日の出来事	第二章 近代的伝説研究の序章
第三章 植民者の希望と現実	第三章 現代に生きる伝説の貌
第四章 経済繁栄の蔭で	あとがき

第一部では、現代の世界に流布している笛吹き男の話が、いつ、どのような状況のもとではじめて伝説として形成されていったのかを明らかにしようとする。それはいいかえれば伝説の核をなす歴史的事実を探りだし、なぜその事実が伝説と化していったのかを究明することである。氏によれば、16世紀半ば以前の史料には鼠捕り男のモチーフは全くみられず、ただ130人の子どもの失踪が伝えられているだけである。つまり、今日の伝説の原型は16世紀の半ば頃この二つのモチーフが結合することによって出来上がったと考えられるのである。そこで、鼠捕り男のモチーフがつけ加えられた理由の解明は後にゆずり、まずは笛吹き男による子どもたちの誘惑のモチーフを追求しようとする。子どもたちの失踪を伝える直接証拠を求めて、いわゆる中世史料の領域に入っていくのである。

その結果、子どもたちの失踪を伝える最古の記録としてハーメルンのマルクト教会のガラス絵(1300年頃)、ハーメルンのミサ書『パッシオナーレ』(1384年頃)、リューネブルクの手書本(1430~50年頃)の三つを突き止める。これ以後の史料はすべて二次史料であることから、以上の三点の史料をもとに伝説の原型を探っていく。すると、これら三点の史料すべてに共通しているモメントとして事件の日付が浮かび上がってくる。すなわち、「1284年6月26日、ハーメルンの子どもたち130人がカルワリオのあたりで行方不明になった」というのが、この伝説の核をなす歴史的事実として確認されるのである。そうすると、次にはこの130人の子どもたちはどうして行方不明になったのかが問題になる。

130人の子どもたちの失踪の原因についてのほぼ400年に及ぶ研究史を整理すると、25もの説が浮かび上がってくるが、それらの多くは「子供たちは何処へ行ったのか、というような謎解きの関心によって支えられて」おり、「ハーメルンの町と住民、当時の世界と社会について」の知識や観点がなおざりにされてきたと阿部氏は批判する。そして、「なぜ子供たちが出て行かなければならなかったのか、なぜ子供たちの失踪がこれほど有名な伝説となったのか、という点にむしろ関心を集中すべき」だと述べ、¹²⁾ 当時のハーメルン市内の状況とリューネブルク手書本の成立した1430~50年までの変化をみようとする。併せて、これまでの西欧における検討に値する原因論＝仮説を紹介し、阿部氏の考えを述べていく。

たとえばハーメルン市の成立事情を明らかにする中でゼデミューンデの戦い(1260年)による

戦死説を検討し、また市制の整備が都市住民の生活や社会関係に与えた影響を考察する。さらに視野を12・13世紀のヨーロッパに拡大して東ドイツへの植民説を検討しながらも、やはりこの伝説につきまとう不幸な結末を暗示させる暗さから、再びハーメルンの市民層に目を向ける。とりわけ、経済繁栄の蔭で生活の苦しさで喘いでいた下層民や子どもたちに目を向けたとき、少年十字軍や舞踏行進、祭におけるプロセッション（練り歩き）などのもつ意味がはっきりと理解されてくる。そして、その延長線上にヴォエラーの遭難説を位置付けるのである。それは、「ヨハネ祭の日に、夏至の火を町から二マイルほど離れたポッペブルクの崖の上に灯す習慣があったことから、子供たちは大勢で祭の興奮のあまりこの火をつけに出かけ、その湿地帯にある底なし沼にはまり込んで、脱出できなくなった」¹³⁹という解釈である。次いで、「中世において〈笛吹き男〉の属する遍歴芸人の階層が、教会や社会から差別された賤民であり、悪行の象徴としてあらゆる不幸な事件の責任を転嫁されていた」¹⁴⁰とするヴォエラーの興味深い説を紹介する。阿部氏も基本的にこの遭難説を支持した上で、事件の背後における当時の庶民の社会生活の厳しさを指摘し、同時に単なる事故にすぎない事件が伝説化していった要因を分析する。

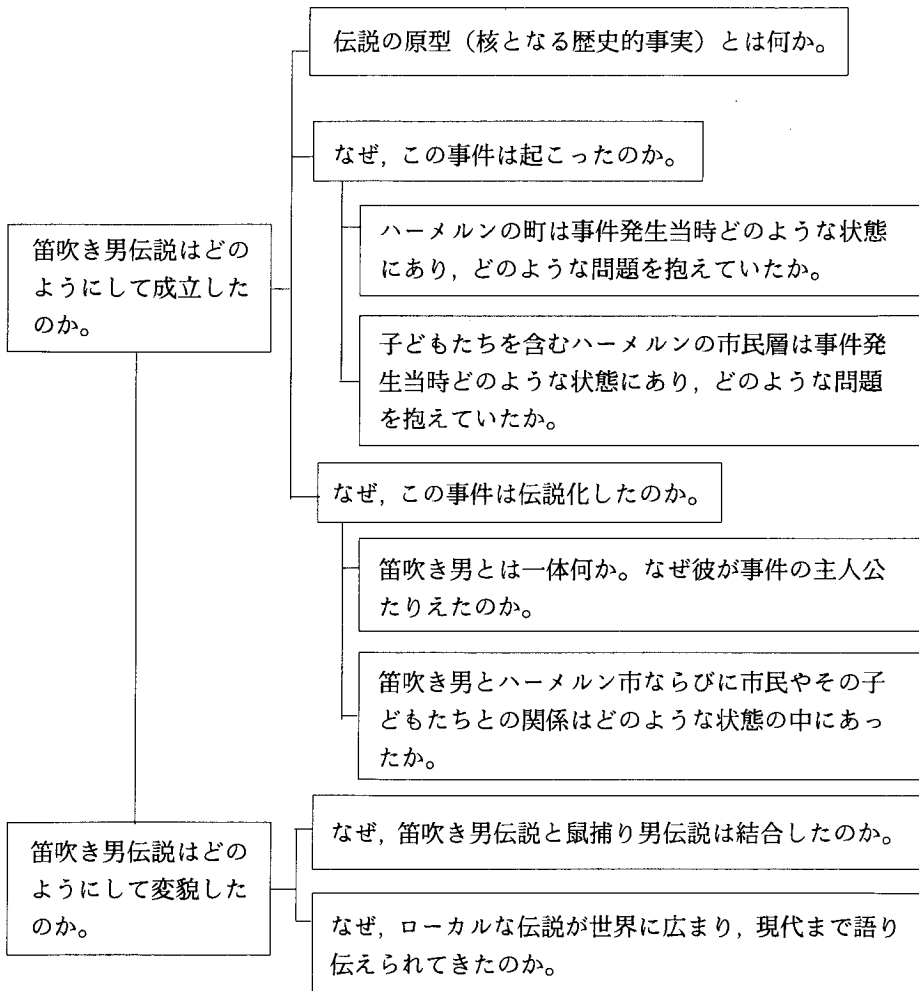
続く第二部では、伝説変貌のあとを辿ろうとする。とくに、16世紀半ばにおいて、なぜ鼠捕り男のモチーフが加えられたのか、両伝説結合の条件と背景は何かを追求する。そこで、まずハーメルンの伝説とは独立に伝えられてきたヨーロッパ各地の〈鼠捕り男伝説〉を考察し、それらに共通する事項を拾い出す。その結果、「鼠その他の害虫の被害に対して一般の人々は何のなすすべもなく、ただ被害を一方的に受けるばかりであったことと、鼠などを退治し、一般の人々を救ったのは、例外なく見知らぬ男、あるいは都市や農村の共同体内には住まない、非日常的な生活を営む人間であったこと」¹⁴¹が明らかになる。では、これがどのようにして子供たちの失踪と結び付いたのだろうか。

阿部氏は、第一にハーメルンが古来水車の町として著名であったこと、第二に笛吹き男と鼠捕り男の社会的地位は同一であり、当時の身分的秩序において両者は全く区別しえなかったこと、第三に当時のハーメルンがペスト、洪水、火災などの自然災害に加えて、市内を二分する宗教戦争に見舞われ、それに対する庶民の怨念が為政者への批判の心を芽生えさせていたことを指摘する。つまり、「市参事に災害の責任があるのに、子供らと貧しい親たちがそれを償わねばならなかった」¹⁴²という形で、笛吹き男の伝説は鼠捕り男と市参事の裏切りの伝説へと転化していき、そのことによって、この伝説はハーメルンという一都市をこえて普遍的な意味をもつことになったというのである。

その後、知識人層を中心に近代的伝説研究が開始されるが、それとともに庶民の語り伝えてきた伝説が虚構として否定されたり、一段と高いところから庶民の心情を解説したりする傾向が現れてきた。そうした中で、阿部氏は次のようにいう。「学者がどのように解釈し、解明しようとも、〈ハーメルンの笛吹き男と130人の子供の失踪〉の伝説はたとえ原型からどんなに変貌しようとも、忘れ去られることはないだろう。親が成長した子供を旅立たせ、親しい者同士が別れを告げ、あるいは住みなれた土地を去って未知の国に旅立ってゆく時、あるいは現在の生活に絶望した親たちが子供に美しいバラ色の未来の国を期待している時、このようないつの世にも変らない情景がみられる限り、人々の胸の奥底に生きつづけることだろう。また人間が他の人間を差別の目でみることをやめない限り、〈笛吹き男〉はいつの世にも登場するだろう」¹⁴³と。そして、このような庶民の心情を理解し、伝説の世界に身を浸しながらそれを生きようとした研究者として、ハインリッヒ・シュバヌートを紹介する。彼はいわゆる知識人の一員でありながら、その一生をほとんど知識人としての特権を享受することなく、いわば一庶民として、徹底した文書探索により伝説の変貌の過程を描き出した。阿部氏はこのシュバヌートの生き方に、真の伝説研究のあり方を見て取るのである。

2.3 「ハーメルンの笛吹き男」における問いの構造と伝説研究のモデル

本書における阿部氏の社会史研究の概略は上述の通りであるが、そこに見られた研究方法を再度基本的な問いの構造として示すと次のようになる。



以上の問いの構造図からも明らかなように、阿部氏の伝説研究のプロセスは三つの段階にわけとらえることができる。すなわち、

- ① 伝説の核をなす歴史的事実を抽出し、伝説における事実の部分と虚構の部分をはっきりさせる。
- ② 伝説の中の事実の部分にとくに着目し、事件の原因や社会的背景を究明する。
- ③ 伝説の中の虚構の部分にとくに着目し、民衆の心性や伝説化の過程を究明する。

これは、歴史学における伝説研究の一つのあり方を示しているが、同時に歴史教育で伝説を教材化する場合にも適用することができるものである。その意味で、これは伝説研究及び伝説教材化のモデルとみなしてよいだろう。以下、このモデルに従って具体的な授業プランを作成してみたい。

3 阿部氏の社会史研究の方法を取り入れた歴史授業構成

3.1 「ハーメルンの笛吹き男」伝説教材化の視点と方法

この伝説の教材化に当たってまず留意すべきは、都市、市民、笛吹き男などの問題を単にハーメルン市の問題として孤立的に扱うのではなく、当時のハーメルン市がおかれていた全ヨーロッパ的な位置の中で扱うことである。そうして初めて、「この伝説の探求は単なる謎解きの面白さを越え、ヨーロッパ社会史に接近するひとつの突破口となりうる」¹⁸⁾のである。したがって、ここでは中世後期のヨーロッパという時間的・空間的の広がりの中でハーメルン市の問題をとらえることにする。逆にいえば、ハーメルンという窓を通して当時のヨーロッパ世界を覗いてみるのである。

そのためには、到達目標としての認識内容をハーメルン市に固有の事實的・記述的知識で構成するのではなく、中世後期のヨーロッパ世界全体に妥当する概念的・説明的知識で構成することが必要である。その中心となるのが「中世都市」の理論であり、それを支える「市民」、「ギルド」、「下層民(遍歴芸人、子ども)」などの概念である。理論は一般命題のかたちで表すと共に、生徒の理解を容易にするためにできるだけ図式化して示すことが望まれる。ここでは、中世都市の変遷過程をヴィク集落の時代(10～11世紀)、都市領主の時代(11～13世紀)、都市共同体の時代(13～15世紀)と三つに区分して図式化してみる。

また、現代に生きる教師・生徒の生活や意識との関わりの中で着目したいのが、中世における子どもや芸人の地位、祭の様相などである。現代の子どもは大人によって無条件に保護されるべき存在とみなされているし、芸能界は多くの人々にとって憧れの世界でもある。だが中世においては逆であった。子どもは小さな大人にすぎなかったし、芸人は賤民に属していた。ただ祭だけは今と性格的に変わっていないが、民衆の発散するエネルギーの量と方向性においては大きく異なっていた。こうした事実を目を開かされたとき、生徒は歴史を通して現代を認識し、また自己を認識することになるであろう。そして、深くて確かな現代認識と自己認識こそが歴史認識を鍛え育てることにつながるであろう。

なお、授業過程については基本的に阿部氏の伝説研究のモデルに従うことにし、授業プランは、教師の発問と資料および生徒に期待する認識(回答)からなる教授書の形で示すことにする。教授書の利点は、①授業過程が確定されており誰にも再現可能になっていること、②認識内容が到達目標として明示されているため批判検討が容易なこと、③発問、資料、回答がセットになっているためその整合性や適否が判定しやすいこと、などである。以下、教材の内容と理論のレベルを考慮して、高等学校の世界史を対象にした教授書試案を提示してみたい。

3.2 高等学校世界史教授書試案「ヨーロッパ中世後期の世界」

(1) 単元名「ヨーロッパ中世後期の世界」

(2) 単元の目的 ハーメルンの笛吹き男伝説を通して、西欧中世の都市構造と民衆意識を解明する。

(3) 到達目標

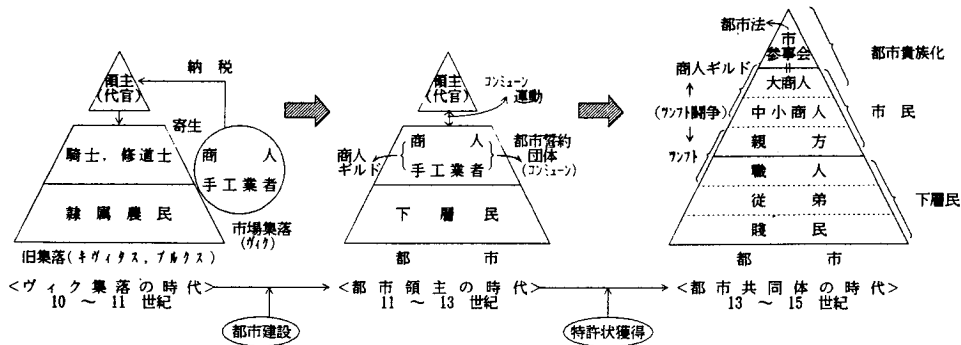
1) 知識の構造¹⁹⁾

1. 伝説とは一定の歴史的事実に基づいて形成されるものである。
2. 中世都市は堅固な城壁に囲まれた特殊な平和・法共同体であり、商業・手工業の拠点としての経済共同体でもある。
 - 2-1. 中世都市は城館ないし教会と広場(市場)を中心に構成され、石造りの周壁を備えている。
 - 2-2. 中世都市は司教座や軍事的集落の外側に商人や手工業者が定住して建設した市場集落(ヴィ

ク)に端を発する。

- 2-3. ヴィク集落はやがて旧集落を包摂し、商取引の安全と自由を守ために城壁をめぐるすとともに、都市領主の保護を受けた。
- 2-4. 都市住民は経済の発達とともに領主の支配を拘束と感ずるようになり、都市誓約団体（コンミュン）を結成して闘争や交渉を行い、領主から特許状を獲得した。
- 2-5. 中世都市（自治都市）は都市法をもち、市参事会が中心となって独自の裁判・課税・立法・鑄貨権を行使した。
3. 都市の法制的整備は市内における富者＝大商人（遠隔地商人）の支配を確立し、社会的格差を増大させた。
 - 3-1. 都市の自由とは、流入した人々がかつて人格的支配を受けていた農村の領主から自由となるだけでなく、都市内の生活においても領邦君主の恣意的支配下に置かれないことを意味した。
 - 3-2. 市民とは都市内部で一定の財産（主に屋敷）をもつ自由人であり、都市共同体の構成員である。
 - 3-3. 中世都市の市民生活の中心は仲間団体としての商人ギルドやツunftであり、それが組合員の日常生活を倫理的に規制した。
 - 3-4. 都市法の確立や市制整備とともに市参事会員は大商人層に独占されるようになり、中小商人や手工業者層は市政から遠ざけられた。
4. 中世の庶民は日常生活の苦しさや将来への不安からの瞬時の解放を求めて、盛大な祭を繰り広げた。
 - 4-1. 近代以前には、現代のように外界や社会組織の側から子どもの領分は与えられていなかったため、子どもは小さな大人として厳しい社会生活に耐えていかねばならなかった。
 - 4-2. 中世には少年十字軍や舞踏行進のように、子どもたちが集団で忘我の世界に踊り出る事件は珍しくなかった。
 - 4-3. 中世社会では年中行事としての祭が数多く催されたが、その形態は本質的にプロセッション（練り歩き）であった。
 - 4-4. 中世には祭を求めて都市や農村を遍歴する芸人の一団があった。
5. 伝説は本来民衆の歴史叙述であり、その時々々の民衆の置かれた社会的状況や心のあり方を反映している。
 - 5-1. 事件はそれが民衆に与えた衝撃が大きければ大きいほど、原因（真相）がわからなければわからないほど伝説化されやすい。
 - 5-2. 中世では土地所有が社会的序列の基礎となっていたため、土地をもたず定住もしない者は差別された。
 - 5-3. 中世には不幸な事件や災害の原因は往々にして他所者や賤民のせいになされた。
 - 5-4. ローカルな伝説も、その伝説に込められた民衆のおもいに普遍性が見られるとき、世界に広がっていく。

2) 中世都市の社会構造とその変遷 (モデル図)²⁰⁾



(4) 単元の構成 (6時間配当)

- 1) 導入 ハーメルンの笛吹き男伝説の核をなす歴史的事実とは何か。—— 1時間
- 2) 展開 なぜ、この事件 (子どもたちの失踪) は起こったのか。—— 4時間
 - ①事件発生当時、ハーメルンはどのような状況に置かれていたのか。(2時間)
 - ②事件発生当時、ハーメルンの住民はどのような状態にあったのか。(1時間)
 - ③なぜ、ハーメルンの子どもたちは町を出なければならなかったのか。(1時間)
- 3) 終結 なぜ、この事件が現在広く知られるような伝説になったのか。—— 1時間

(5) 単元の展開

発問	指示・資料	認識内容
<ul style="list-style-type: none"> ・今日は童心に戻って絵本を読んでみよう。 ・この物語に興味をもちたり、不思議に思ったりしたことをあげなさい。 ・この絵本のもとになったのはグリム兄弟の『ドイツ伝説集』であるが、なぜグリムはこの物語を童話集の方に入れなかったのか。 ・そうすると君達の出した疑問が解けるかもしれない。ではこの伝説の核をなす歴史的事実とは何だろうか。現在入手しうる最古の資料から、共通する事項を拾い 	<ol style="list-style-type: none"> ①「ハーメルンの笛吹き」 ・指名し答えさせる。 ・考えさせる。 ②マルクト教会のガラス絵碑文 ③ハーメルンのミサ書 ④リュエネ 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の朗読を聞き、ハーメルンの笛吹き男の物語の概要を把握する。 ・笛吹き男の存在。笛の音に鼠が繰られること。なぜ子どもたちはついていったのか。子どもたちは一体どこへいったのか。 ・童話は子ども用に創作された架空の話であるが、伝説は一般に何らかの歴史的事実に基づいて作られ、伝えられてきたものであり、この物語は明らかに後者に属しているから。 ・1284年のヨハネとパウロの日 (6月26日) に、ハーメルンの子どもたち130人が、ハーメルン市外のカルワリオのあたりで行方不明になった。

<p>出してみよう。(いつ、どこで、誰が、どうしたのか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦この事実と現在にまで伝わっている話と比較して、最も異なっている点はどこか。 ◦鼠捕り男の問題は後に考えるとして、なぜ最古の史料では子どもたちの失踪原因が記されていないのか。 ◦では、事件の真相に迫るためにはどんな点が明らかにされねばならないか。 	<p>ブルクの手書本</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦指名し答えさせる。 ◦考えさせる。 ◦指名し答えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦子どもたちの失踪の原因について一切触れられていない。(鼠捕り男による市への復讐というモチーフが出てこない。) ◦記すまでもなく自明のことだった。 ◦事件発生当時すでに原因は謎に包まれていて記しようがなかった。 ◦事件発生当時のハーメルン市の状態、その住民とくに子どもたちの置かれていた状況、笛吹き男の正体と子どもたちとの関係など。
<ul style="list-style-type: none"> ◦そこで、まずハーメルンの町から見ていこう。現在のハーメルンはどんな町か。 ◦中世のハーメルンはどんな町だったか。外見的特徴を指摘しなさい。また、それは他の中世都市と比べてどうか。 ◦事件発生当時のハーメルンはどんな状況にあったか。それを明らかにするために、まず13世紀の西欧社会やドイツの様子を見てみよう。 ◦この頃のハメルーンが直面した最大の問題は何だったか。 ◦果たしてこの説は受け入れることができるか。 ◦ゼデミューンデの戦はなぜ起こったのか。この問題を考えるために市の成立立ちを調べてみよう。ハーメルンは都市としての形態をいつ頃、誰により確立したか。 ◦都市建設前のハーメルンはどういう状態だったのか。 	<p>⑤地図帳</p> <p>⑥ハーメルンの特色</p> <p>⑦中世都市ハーメルン</p> <p>⑧中世都市の俯瞰図</p> <p>⑨西欧各国年表(1201-1300年)</p> <p>⑩ゼデミューンデの戦の記念碑</p> <p>⑪中世ハーメルン市略年表</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦指名し答えさせる ◦年表から説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ハーメルンは西ドイツ北部ヴェーザー河畔にあり、小都市だが中世以来の古い町で、製粉業など食品工業が盛んである。 ◦市街地は城壁と堀により周囲の田園地帯と明確に区別され、出入り口には城門がある。市内は通りに沿って家屋が密集しており、中心部には広場と教会がある。この形態は他の中世都市にも見られる一般的なものである。 ◦13世紀の西欧は十字軍などで対外拡張を図るとともに、東方貿易が発展し都市同盟も成立するなど社会に活気がみなぎっていた。 ◦ドイツでは全般的に皇帝権が衰退し、またドイツ騎士団による東方植民も開始された。 ◦1260年7月28日ハメルーン市外のゼデミューンデ村で市民軍はミンデン司教軍と交戦し、壊滅的敗北を喫し多くの若者が戦死した。長い間ドイツではそれが子どもたちの失踪の原因とされ、笛吹き男は軍の先頭に立つらば手と解釈された。 ◦日付の点でも、失踪したのが子どもたちであるという点でも事実と異なり受け入れ難い。 ◦12世紀末エーフェルシュタイン伯を中心に、大商人や土地所有者らが協力して建設し、13世紀半ばに現在の都市の輪郭が完成した。 ◦フルダ修道院の前進基地としての聖ボンファティウス律院付近に、10世紀頃から商人の定住集落ができ始めたのがハーメルンの始まりであり、フルダ修道院は国王からその市場

<p>・これは中世都市の初期の段階に出現したヴィク集落というものである。資料をもとに図式化してみよう。</p> <p>・では、この都市建設はなぜフルダ修道院ではなく、エーフェルシュタイン伯によって行われたのか。</p> <p>・さて、問題のゼデミューンデの戦では、なぜミンデン司教が登場してくるのか。</p> <p>・この戦の結果、ハーメルンを取り巻く情勢はどう変わったか。</p> <p>・そうした情勢の中で、ハーメルン自体はどうなったのか。</p> <p>・以上のハーメルンの歴史を中世都市の発達という観点から一般化してみよう。</p> <p>・事件発生当時のハーメルンはどのような状況にあったか、まとめてみなさい。</p>	<p>⑫中世都市ケルンの発展図</p> <p>・年表から説明する</p> <p>・年表から説明する</p> <p>・年表から説明する</p> <p>⑬ハーメルン都市法</p> <p>・モデル図を板書し、説明する。</p> <p>・指名し答えさせる。</p>	<p>高権の特許状を得ていた。</p> <p>・前掲のモデル図〈ヴィク集落の時代〉</p> <p>・エーフェルシュタイン伯は12世紀初頭より律院の守護の地位にあった上に、皇帝を助けてヴェルフェン家のハインリヒ獅子公を破ったため、その遺領ニーダーザクセン地方に新しい支配領域を形成しようとしていた。</p> <p>・ハーメルンの実質的支配権をエーフェルシュタイン伯に奪われたフルダ修道院が聖界の上級支配権をもつミンデン司教区にハーメルンを売却したため、今後はミンデン司教がハーメルンの併合による領域一円化を目指した。</p> <p>・ミンデン司教は勝利したものの失地回復を狙うヴェルフェン家のブラウンシュバイク公の介入を招き、1260年の条約でハーメルンを両者で半分ずつ授封することになった。そして1277年に守護職も手に入れたヴェルフェン家によるハーメルン支配が確立していった。</p> <p>・1277年ハーメルンはヴェルフェン家を君主とする領邦都市として特許状を獲得するとともに、代官職を買取り新たに市長職も設けた。</p> <p>・前掲のモデル図〈都市領主の時代〉と〈都市共同体の時代〉</p> <p>・領邦都市として、都市法や社会制度が整備され、都市の生活規範が固められつつあった。</p>
<p>・ハーメルンが都市としての形を整えていた頃の住民はどのような状態にあったか。</p> <p>・「都市の空気は自由にする」というが、この場合の自由とは何を意味したか。</p> <p>・住民は規定の年月がたてば、皆同じように自由になったのか。</p> <p>・中世の市民とはどういう人々をさしたのか。</p>	<p>・問題を提起する</p> <p>⑭ハーメルン都市法</p> <p>⑮都市住民と市民権</p> <p>・定義する</p>	<p>・都市の自由とは、流入した人々がかつて人格的支配を受けていた農村の領主から自由になるとともに、都市内の生活においても領邦君主の恣意的支配下に置かれなことを意味した。</p> <p>・律院隷属農民のように都市法成立前から市内に居住する者にはこの法は適用されなかったし、貧困層には市民権が与えられなかった。</p> <p>・市民とは都市内部で一定の財産をもつ自由人であり、都市共同体の構成員である。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・市民権をもつ者は皆平等だったのか。 ・市民の日常生活におけるルールや倫理を形成したのは、一体何か。 ・市民権をもつことのできない下層民とはどんな人々で、どんな生活を送ったか。 ・都市の行政を担当する市参事会員にはどのような人たちがなったのか。 ・以上のことから、事件発生当時のハーメルンの住民はどんな状態にあったといえるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ⑮ハーメルンの市民層 ⑯中世都市の仲間団体 ⑰中世都市の下層民 ⑱ハーメルンの市参事会制度 ・指名し答えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・都市建設に参加した大商人は中小商人層を支配し、手工業者でも組合を結成できたのは少数で、多くは人格的自由を制限されていた。 ・中世都市の市民生活の中心は仲間団体としてのギルトやツunftであり、それが組合員の日常生活を倫理的に規制した。 ・都市下層民には職人、徒弟、奴婢、賃金労働者、婦人、貧民、乞食、賤民などがおり、身分的、経済的に惨めな生活を送った。 ・初期には誰でも市参事会員になれたが、13世紀後半になると次第に大商人層（都市貴族層）に独占されるようになった。 ・都市法の確立や市制整備とともに市内における富者＝豪族の支配が確立し、社会的格差は増大した。かつては都市の自由を目指して共に戦った庶民も、次第にエネルギーの発散場所を失い、鬱屈した生活に陥っていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・その頃、子どもたちはどのような状態にあったのか。 ・確かめてみよう。 ・子どもたちがその重荷に耐えられなくなった時、どのような行動に出たか。 ・そうした行動は果たして異常なものだったのか。 ・子どもたちの失踪日前後に何か祭があったろうか。 ・このヨハネ祭と事件はどう結び付くのか。 ・では笛吹き男とは一体何者か。 ・遍歴楽師と事件とどんな関係があるのか。 ・以上のことから、なぜ子どもたちは町を出なければならなかったのか説明してみなさい。 ・なぜ、この事件が現在広 	<ul style="list-style-type: none"> ・予想させる。 ⑲中世の子ども ⑳少年十字軍関連地図 ㉑中世の祭 ㉒洗礼者ヨハネの祭 ㉓ヴォエラーの遭難説 ・考えさせる。 ・説明する ・指名し答えさせる。 ・問題を提 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人と同じように厳しい状況にあった。あるいは、逆に大人により大事にされていた。 ・中世には現代のような子どもの領分はなく、大人の社会に直に投げ出されていた。 ・フランスやドイツで起こった少年十字軍や、エルフルトでの舞踏行進のように、集団で忘我の世界に踊り出ることが起こった。 ・子どもたちの行動は練り歩きとしての祭の延長であり、決して異常なものではなかった。 ・6月24日はヨハネ祭の日であり、若者たちは山上や広場で火を燃やし踊りあった。 ・ヨハネの日に夏至の火を郊外の崖の上に灯す習慣があったことから、子どもたちは祭の興奮のあまりこの火をつけに出かけ、湿地帯の底なし沼にはまり込んで死亡した。 ・派手な服装や笛、祭との関連からして、笛吹き男は遍歴楽師の一員と考えられる。 ・事件そのものと直接関係ないとしても、祭の進行や興奮に大きな役割を果たした。それが伝説の主役になった理由は次時に考えよう。 ・厳しい生活や差別に喘いでいた庶民とその子どもたちにとって、祭は束の間の解放感を味わうものとして興奮状態に陥りやすかった。事件の背後にはそうした社会状況があった。

<p>く知られるような伝説になったのか。</p> <p>・まず、なぜこの事件は伝説化したのか。これまでのことから考えてみよう。</p> <p>・子どもたちの失踪が笛吹き男のせいにされていったのはなぜか。</p> <p>・なぜ、遍歴芸人は賤民とされたのか。</p> <p>・子どもたちの失踪伝説に鼠捕り男のモチーフが加わったのはいつ頃のことか。</p> <p>・当時の鼠捕り男とは一体どんな人間だったのか。</p> <p>・なぜ、鼠捕り男と子どもたちの失踪伝説が結合したのか。(鼠捕り男はなぜ子どもたちを誘惑したのか。子どもたちの失踪の原因は誰にあるか。そこには庶民のどんな思いが窺えるか。)</p> <p>・では16世紀半ば頃のハーメルンで、庶民の不満を生んだものに何があったか。</p> <p>・悲惨な運命に見舞われたとき、庶民はどのようにしてそれに耐えたか。</p> <p>・最後に、なぜこのローカルな伝説が世界に広まったのか。</p>	<p>起する。</p> <p>・指名し答えさせる。</p> <p>②④ヴォエラ一説にみる笛吹き男</p> <p>②⑤遍歴芸人の社会的地位</p> <p>②⑥鼠捕り男のモチーフの出現</p> <p>・説明する</p> <p>・考えさせた後に指名し、答えさせる。</p> <p>②⑦16世紀のハーメルン</p> <p>・考えさせる。</p> <p>②⑧民衆と伝説</p>	<p>・人口約2000のハーメルンにとって、130人の子どもの失踪は大変な衝撃であった。</p> <p>・事件発生当時から真相が不明だったため、住民の恐怖心や想像力がかきたてられた。</p> <p>・中世には笛吹き男の属する遍歴芸人は賤民に位置付けられていたため、何か不幸な事件が起こり原因が不明の場合、すでに去ってしまった遍歴芸人に原因を求めることがあった。</p> <p>・土地所有が社会的序列の基礎をなした中世社会で、土地をもたず定住しない者は、芸人にかぎらず差別された。</p> <p>・16世紀半ばの史料で初めて鼠捕り男が子どもたちの失踪と結び付いて現れている。</p> <p>・笛吹き男と同様土地に定住せず、鼠を退治して遍歴する被差別民であった。</p> <p>・鼠捕り男は市参事会の報酬不払いという裏切りに対する復讐として子どもをさらったのであり、責任は市参事会にある。したがって、鼠捕り男のモチーフ出現の背後には、市参事会の政策に対する庶民の不満があったのかもかもしれない。</p> <p>・当時のハーメルンは大火、大洪水、ペストと災害に見舞われるとともに、宗教戦争が庶民を巻き込んで大きな被害を出していた。</p> <p>・民衆はどんなに苦しくとも怒りをぶつけて怨みを晴らすことはできなかった。父祖から伝えられた古伝説の中にその苦しみを凝縮していったのではないか。</p> <p>・現実には知識人による文字を通しての普及が大きい、それが人々の心をとらえたのは犠牲者が社会の中で最も弱い庶民や子どもであったからである。世の中から強者による弱者の支配と差別がなくならないかぎり、この伝説は語り継がれるだろう。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

〈資料出典〉

- ①講談社絵本シリーズ、②阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』平凡社、1974,p. 22、③前掲②書、p.23、④前掲②書、pp.23-24、⑤省略、⑥『世界地名大事典・2』朝倉書店、1973,p.989、⑦角山

栄編『図説経済学体系8・西洋経済史』学文社, 1971, p.28, ⑧矢守一彦『都市図の歴史－世界編』講談社, 1975, pp.256-8, ⑨『新選世界史図表』第一学習社, 1983, p.130, ⑩前掲②書, p.47, ⑪前掲②書より作成, ⑫『日本と世界の歴史・9』学習研究社, 1976, p.343, ⑬前掲②書, pp.50-51, ⑭前掲②書, pp.52-53, ⑮前掲②書, pp.55-56, ⑯阿部謹也『中世の星の下で』影書房, 1983, pp.197-8, ⑰前掲②書, pp.93-95, ⑱前掲②書, p.59, ⑲中村雄二郎『魔女ランダ考』岩波書店, 1983, pp.156-7 ⑳前掲②書, p.75 ㉑前掲②書, p.116, ㉒植田重雄『ヨーロッパ歳時記』岩波書店, 1984, pp.164-5, ㉓前掲②書, pp.128-9, ㉔前掲②書, pp.130-1, ㉕前掲②書, pp.136-7, ㉖前掲②書, pp.19-20, ㉗前掲②書, pp.167-8, ㉘前掲②書, pp.192-3,

4 おわりに

本研究では、現在閉塞状態に陥っているといわれるわが国の中等段階の歴史授業を活性化するために、まず生徒の生の声に耳を傾けることから始めた。そこで注目されるのは、生徒たちが単なる教養としての歴史ではなく、現代の世界や自分たちの生活と直にきり結ぶような歴史の授業を求めていることであった。筆者はその課題に応える途は近年の社会史研究に探ることができるのではないかと考え、阿部謹也氏の伝説研究の方法を検討してみた、その結果、三段階よりなる伝説研究のモデルを引き出すことができ、それを応用して6時間相当の世界史の授業プラン（教授書）を作成した。もちろん、それはまだひとつの授業モデルにすぎないのであり、実際の授業の場で検証し改訂して行くべきものであることはいうまでもない。ただ筆者の見通しによれば、この同じモデルによってロビン・フッド、ウィリアム・テル、吸血鬼ドラキュラといった伝説も教材化できると思われる。

なお、教授書方式の授業では、探求を促す問いの設定にしても生徒同士の討論にしても、基本的に教師主導で授業は展開されていく。筆者も中等段階の歴史授業ではそれが現実的であると考え、ひとつの大きな問題に対してどの方向からアプローチするのか、またそのためにどんな小さな問いを立てていったらよいのかといったことは、できるだけ生徒に判断させたいものである。そのためには、事前に教師の側でさまざまな探求のプロセスを試み、複数の筋道を準備しておくことが必要である。²⁰⁾ また、今回は紙数の都合で教授書資料を割愛せざるをえなかったが、すぐれた資料の収集も教授書の作成には欠かせない。その意味でも、社会史研究の成果には学ぶべきものが多いといえる。今後、日本史・世界史の各領域で社会史研究に基づく授業構成が一層進展することが望まれよう。

(注)

- 1) 筆者の勤務していた愛知県立岡崎東高等学校でのことである。この時点で設立14年目の新しい学校であり、生徒も概しておとなしい。
- 2) 角山栄『辛さの文化 甘さの文化』同文館, 1987年, p.15
- 3) 阿部謹也『中世の星の下で』影書房, 1983年, p.85
- 4) 阿部謹也『歴史と叙述－社会史への道－』人文書院, 1985年, p.86
- 5) 同上書, p.202
- 6) 阿部謹也『中世賤民の宇宙－ヨーロッパ原点への旅－』筑摩書房, 1987年, p.27
- 7) 阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社, 1981年, pp.4-5
- 8) 前掲書4), p.203
- 9) 阿部謹也『社会史とは何か』筑摩書房, 1989年, p.97
- 10) 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男－伝説とその世界－』平凡社, 1974年, p.12

- 11) 阿部謹也『歴史を読む－阿部謹也対談集－』人文書院, 1990年, pp.8-12
- 12) 以下すべて前掲書10), ゆえに掲載ページのみ示す。p.30
- 13) p.128 14)p.130 15)p.188 16)p.192 17)pp.215-216 18)p.33
- 19) 中世都市の理論およびその命題化にあたっては, 阿部氏のもの以外に次の文献を参考にした。

堀米庸三編『西欧精神の探求－革新の十二世紀』日本放送出版協会, 1976年
 増田四郎「西ヨーロッパの中世都市」(『中世史講座3・中世の都市』学生社, 1982年)
 F.レーリッヒ著, 魚住・小倉訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』創文社, 1978年
 H.プレティヒャ著, 関楠生訳『中世への旅・都市と庶民』白水社, 1982年

- 20) モデル図は上記文献を参考に, 筆者が作成した。
- 21) 探求の基本型と授業過程および探求の変型と複数の指導計画については, 次の文献に詳しい。
 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978年, pp.154-159

Construction of History Lesson based on the Method of Social History (I)

Tomohito HARADA

The main purpose of this paper is to construct the history lesson based on the method of social history. First, we analyze the method of social history through the work of Kinya Abe "The Pied Piper of Hamelin", and we make clear an important model for studying legends. Secondly, we apply the model to the lesson construction of world history in senior high school.

The characteristics of planned lesson "Hamelin in the Middle Ages — the legend and people —" is as follows,

1. The teaching content is mainly organized with the theory of medieval cities in Europe.
2. The teaching process is formed according to the method of inquiry.

Key Words : Social History, History Lesson, Lesson Construction, Medieval History, Historical Legend, Inquiry Method